



Title	「ただいま」からの臨床哲学
Author(s)	高原, 耕平
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 10-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79241
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 臨床哲学の今——在学院生・修了生によるエッセイ

「ただいま」からの臨床哲学

高原耕平

保護膜と触角

「帰還困難区域」という立て看板が道路沿いにぼつぼつ見えはじめる。対向車線のダンプカーの車列とすれ違ってから視線を反対側に向けると、沿道の家々の雨戸が閉じきったままだと気づく。いちめん灰が積もった平原に迷い込んだような錯覚がある。レンタカーを走らせてゆくと、ここらへんはひとが住んでいるんだなということが直観的にわかるエリアに入る。なぜわかるのかはわからない。風景に色やツヤのようなものを感じる。「まちなみ」の生気がある。あ、庭の植木が剪定されてたりするんですね、だからわかるんや、と助手席の S.先生に言う。2011 年 3 月 11 日、発電所を中心として避難指示が宣告され、その半径は矢継ぎ早に拡大された¹。その後、段階的に避難指示が解除され、地域はまちなみの生気をかろうじて取り戻し始めた。他方で長期的に年間積算線量が一定値を下回らない可能性のあるエリアは帰還困難区域という名称が与えられた²。

そのまちなみに来ている。福島県浜通りである。

¹ 2011 年 3 月 11 日 20 時 50 分に福島第一原発を中心として半径 2km 圏内からの避難指示が発令され、同日 21 時 23 分に避難指示区域は半径 3km に拡大された。翌日 5 時 44 分に半径 10km に、同日 18 時 25 分には半径 20km にまで拡大された。同日 17 時 39 分には福島第二原発の半径 10km 圏内にも避難指示が発令された。また、福島第一原発の半径 20km を超える地域についても、浪江町、南相馬市、飯舘村、葛尾村の一部が「計画的避難区域」に指定された。

² 「居住制限区域の一部の地域においては、放射性物質による汚染レベルが極めて高く、避難指示の解除までに要する期間が長期にならざるを得ない地域が存在する。〔…〕このため、長期間、期間が困難であることが予想される区域を「帰還困難区域」として特定し、〔…〕国として責任を持って対応していくこととする。／長期間、具体的には 5 年間を経過してもなお、年間積算線量が 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある、現時点で年間積算線量が 50 ミリシーベルト超の地域を「帰還困難区域」に設定する。／同区域においては、将来にわたって居住を制限することを原則とし、線引きは少なくとも 5 年間は固定することとする」（原子力災害対策本部「ステップ 2 の完了を受けた警戒区域及び避難指示区域の見直しに関する基本的考え方及び今後の検討課題について」平成 23 年 12 月 26 日、11 頁）。

「〔現時点では〕帰還困難区域の避難指示解除準備区域又は居住制限区域への見直しは行わない。〔…〕帰還困難区域の取扱いは、福島復興の先行きに関わる重要な課題である。たとえ長い年月を要するとしても、将来的に帰還困難区域の全てを避難指示解除し、復興・再生に責任を持って取り組むとの決意の下、〔…〕政府一丸となつて、帰還困難区域の一日も早い復興を目指して取り組んでいくこととする」（原子力災害対策本部・復興推進会議「帰還困難区域の取扱いに関する考え方」平成 28 年 8 月 31 日）。

真新しい道や、架けられたばかりの橋もある。津波に曲げられたらしい鉄柱を 1 階部分にさらしたままの建物がある。田んぼだったらしい場所は表土がまるごと剥がされている。と思えば、乾いた色合いの雑草がいちめん広がる場所に出る。ひとが住んでいたのだ、ひとが住んでいたのだ、とこころのなかでうわ言のようになりかえす。それが「ひとが住んでいたのに」に変わったとき、ちぢこまっていた感情がすこし脈をとりもどす。こんなことがあってはならないはずだという怒りが 3 割。喪われてしまっていて、取りもどしようが無いものがあるはずだというかなしさが 5 割。そして、この風景を見ないようにしてきたのはじぶんだ、無かったことにしてきたのはじぶんだ、という罪責感が残りの 2 割。そのようなまぜこぜの感情が胸のまわりにまとわりつく。じぶんの上半身と風景のあいだに保護膜がいつさい無い。

中間貯蔵施設³を社員の方に案内してもらおう。小高い丘のうえの老人ホームの駐車場に入る。老人ホームは 3 月 11 日に避難したときのままだという。テーブルのうえにはモノが置かれたままで、玄関にストレッチャーが 1 台放置されている。9 年 9 ヶ月ここにそのままの。駐車場から福島第一原発を遠望する。「1.5km 先...でしたっけ」と案内役の社員さんが言うと、別の社員さんが「1.3km 先です」と答える。クレーンが乱立している。水素爆発しなかった 2 号機建屋の空色の壁が見える。あ、ほんとうにある、と思ってしまう。別に疑っていたわけではない。ただ、あるものがある。すうっと目がすいこまれる。10 年間、これを見ないようにしてきたんだなとおもう。翌日、地元の高校生たちに会う⁴。震災のときは 7 歳くらい。じぶんたちのまちのことを、表面的な生气や喪失の感覚を通り抜けたところで考え、探ろうとしている。未来のための触角としての役割を引き受けようとしている。取り払われた保護膜がかれらのことばで滲出しなおしてゆくようにかんじる。

神戸にもどる。なにか読まなくては、と焦る。表紙を開いて右手のなかゆびとひとさしゆびではさんでささえて、おやゆびでページを一枚めくって、もう一枚めくって、もう一枚めくって一枚めくる。

³ 福島県内の放射性物質の除染事業により発生した除去土壌等は県内各地で仮置きされた後、福島第一原発を取り囲むエリアに設置された中間貯蔵施設で「中間貯蔵・環境安全事業株式会社」により処理され、一時的に埋設されている。約 1,400 万 m³の輸送対象物のうち、2020 年 12 月時点で約 1,000 万 m³分が搬出されている（環境省「中間貯蔵施設情報サイト」<http://josen.env.go.jp/chukanchozou/transportation/>）。これらの除去土壌等は再生利用や減容化を経たあと、最終的に県外で最終処分される。「国は [...] 中間貯蔵開始後三十年以内に、福島県外で最終処分を完了するために必要な措置を講ずるものとする」（中間貯蔵・環境安全事業株式会社法、第 3 条の 2）。

⁴ 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校。福島県双葉郡には震災前に 5 つの県立高校があったが、長期避難によりいずれもサテライト校としての学校運営を強いられ、平成 27 年からの募集を停止した。これらの高校を実質的に集約するかたちで平成 27 年 4 月より同郡広野町に県立の中高一貫校が開校した。（cf. 学園ウェブサイト「開校の経緯」。および福島県双葉郡教育復興に関する協議会「福島県双葉郡教育復興ビジョン」平成 25 年 7 月）。

分からないこと。分かってはならないこと。消費するのではなく受容しなければならないこと。それは語る私に、聞く我々に、居心地悪さを残す。外部からはどう解釈してもいい。だが、いったん枠に入った瞬間からは、解釈することを拒否しなくてはならない。／それが生きる場だから。(李静和『新編 つぶやきの政治思想』4頁)

ひらがなのかたちと声のおとがずっと目の奥から胸の下までおりてくる。そしてそれらは意味がおいつくのをじっと待っている。「解釈することを拒否しなくてはならない。／それが生きる場だから」。安らぎを与えてくれるようでいて、ドアを開けて帰還困難区域の風景に突き戻してくる。あめとつちから剥がして追い立てて生かshめてゆく「それでも」の10年の畳みよりの無さ。そのことを解釈することを拒否しなくてはならない、と考えようとする。S.先生に、2月にまた福島に行きましようメールする。

臨床哲学は無かった

わたしは2019年3月に大阪大学大学院を退院した。自然災害についての展示・研究機関に勤めている。臨床哲学研究室にいるとき、「臨床の現場」というものがあって、他方に厳正なる文献読解や執筆の時間があるという印象を持っていた。いまはそんなかんじはしない。「ここが臨床だ」「ここが〈現場〉だ」とあらかじめ決意してからそこに入ることもなければ、その場所にいる最中にそのように感じることもない。おぼろげに夢想していた「臨床哲学」は無かった。「聞く」よりも専門家として明晰に喋ることを依然として求められる。現場と哲学の往還は無く、対話や実践の隙間もほとんど無い。現象学的還元も構築主義もフェミニズムも居場所が無く、ただ自然主義・心身二元論に基づくプロジェクトと説法がある。事業評価があり、予算の出どころ・話の落としどころのミーティングが続く。

臨床哲学は無いし、できない。しかしじぶんのまちに帰ってから追い込まれが始まることがある。現場から離れてから、その場所が「現場」だったのだと再構成する。その場にいるときはそのようには実感していない。名刺交換のタイミングや、パワーポイントをがちゃがちゃいじる暇を探して出張が終わる。哲学は無い。知への愛は無い。ところが帰ってきてから揺り戻しがある。あくまで比喩的な言い方だけれど、「よろめき」がある。それは哲学ではない。知への愛といった余裕はない。どちらかというと取り繕っている。

あれは何だったんだ。あの光景はなんだったんだ。生き延びているひとや、そうでなかったひとは、どんなことを考えとるのか。「解釈することを拒否しなくてはならない。／それが生きる場だから」。枠の内側へ歩み降りてゆくヨブの友人たちの背をみる。このあと灰をかぶった友の隣で7日間、彼らはなにも解釈せずなにも声をかけない⁵。けれどもわたしは

⁵ 「ところが彼らは遠くから眼を上げたが、ヨブであることがわからぬほどなので、声をあげて泣き、それぞれ着物を裂き、塵をその頭の上で、天に向かってまき散らした。彼らは七

揺り戻されて弾き飛ばされて、ほつれをごまかすためにどうにか解釈をしなければとあせっている。そういったよろめきを演ずることで、軽く引っ搔かれた良心が甘い唾液に覆われる。

この「ただいま」から後追いのように始まってしまうもの、これは何なのだろうか。2014年に東日本大震災の被災地に初めて1週間滞在した。海と共に生きてきたひとびとが海からあまりに多くを剥ぎ取られたあとを生きのびている、そのような町だった。帰ってきてからしばらく船の上にいるように足元がぐらー、ぐらーっとしていた。2019年に水俣に行ったあと、2020年にバッファロー・クリークに行ったあとも似た体験をした。帰ってから、なにかを読まなくては、なにかを考えなくてはという圧迫に追いつかれる。現地ではたしかに自分なりの発見やおどろきがある。それは旅の前からじぶんがあらかじめ求めていたものでもある。それで満足している。完結している。ところがそれとは別に、気づかないうちに自分の内から漏れ出しているものがあって、それに気づいてあわてて取り繕う。あらかじめ持っていたじぶんの知識や感覚ではたもっておくことができないものがある。とりわけ、自分にとっては現実でなかったことがその地のひとびとにとっては現実であるという食い違いが、頭や指先でくいとめられず、目の奥や記憶から胸の下へ落ちてくるとき、おさえこみがきかなくなり、姿勢がたもてなくなる。

それは表面的な出来事なのかもしれない。時間をかけて丁寧に取材や分析を続けてゆくことで、はじめて静かに開示されてくる真実というものがあるだろう。それに比べるとずっと浅はかである。しかしまた、ショッキングな風景に感情を揺り動かされた、というだけでもない。ある核心を、つまり以後の考えや所作に滲み出てきてしまうもの、洗い落として澄ました顔をしていられないものをまともにくらっている。よろめきや焦りは、感性によってでもなく、冷静な知的作業の積み重ねによってでもなく、むしろもっとも最初に核心が直撃してくるという体験であるようにおもう。

ありうるかもしれない

わたしにとって、それは大切なことである。自分の修士論文と博士論文に通底していた課題は、出来事を「無かったことにする」「見ないようにする」「理解して片付けてしまう」という精神のはたらきを批判し、それを多少なりともほぐす方策を探ることだった。それを考えてきたつもりだった。けれどもいくつかの偶然を経て福島第一原発から1.3kmのところに立ったとき、災害と生存を研究者としてのテーマとしながらけっきょくはこの巨大な災いを見ないようにしてきた、福島を避けてきたのだ、ということに戻ってこざるをえなかった。自前の方法論や知恵だと思っていたものが支えをうしなって、姿勢のバランスをうしなない、焦ったのだろう。

日七夜ヨブと一緒に地に座っていたが、一人も一言も彼に話しかける者はなかった」（関根正雄訳『ヨブ記』2章12-13）。

それは頭のなかの配線を組み替えたり、不適當な部品をいくつか入れ替えたり、フィールドワークのマニュアルを改訂することで乗り切れるものではない。「一つの学問を「身につけて」いく過程は、まさに身体を作り上げていく過程」(宮地 2020、295 頁)なのだとしたら、その身体を支え、包んでいたものが張力をうしない、過去の過程が逆回しになっているのだから。

よろめくこと、取り繕うこと自体は哲学ではない。自分の良心に率直であるというふるまいを自分に見せることを愛しているのであって、つまるところ自分への狭い愛である。公共の善や知を愛しているのではない。しかしよろめくことや焦ることを起点としてももの考えることは、それらを愛することに近づくかもしれない。姿勢が保てなくなるのは、現実を解釈し再生産する作業に頭や指先で従事していた自前の方法論や習慣が意味をなさなくなるからだ。自他の現実のくいちがいに気づき、そこから方法と話し方と所作をあらためて作りなおす営みが、あとからそれと気づく「現場」からのただいまを起点にはじまる。それによって偽物の知恵と偽物の幸福をじぶんと他人に押し付けることが避けられるとすれば、それは哲学に近づくかもしれない。ただ、それは良心の保護回路や過去の積層や下心を隠蔽する癖といった、皮膚の内側にあったものを相手や自分にことわりなく露開してしまうような「グロテスク」(宮地、前掲同書)なふるまいにもなりうる。それもまた取り繕い、取り繕いきれずに読むものや書くことを探して次の旅行の計画を立てる。よろめくけれども、完全にひしゃげてしまわない。そういうあやうさを切り捨てないのであれば、「ただいま」からはじまる臨床哲学もありうるかもしれない。

文献

李静和『新編 つぶやきの政治思想』岩波現代文庫、2020 年。

宮地尚子『トラウマにふれる 心的外傷の身体論的展開』金剛出版、2020 年。

関根正雄訳『ヨブ記』岩波文庫、1971 年。